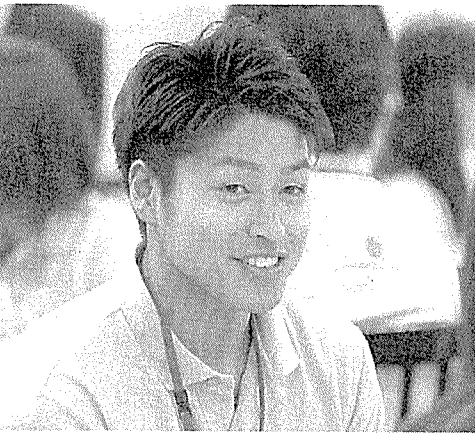


# 語り部大学生「恩返し」

## 夢は水産業の復興後押し

### 気仙沼出身・藤田さん



「遠くへいても被災地を忘れない」と語り藤田さん(5日、東京都港区)＝加藤祐治撮影

東日本大震災で大きな被害を受けた気仙沼市出身で、神奈川大学4年の藤田真平さん(22)は震災直後に故郷を離れ、横浜市で水泳に打ち込みながら、語り部活動を続けてきた。「故郷とのつながりを大切にしたい」と、春からは、三陸の水産物を扱う東京の企業で働き始める。

5年前のあの日、気仙沼高2年だった藤田さんは、揺れを感じて逃げ込んだ6階建てホテルから、街が瞬く間に津波にのまれるのを見つめた。倒れたタンクから漏れた重油で、気仙沼湾全体は火の海となり、実家は全焼。2階まで水没したホテルの周囲も火に包まれ、爆発音がそこかしこで鳴り響いた。

家族は全員無事だったが、5歳から始めた水泳の練習場のプールはがれきの山に。「泳いでいる場合じゃない」と考えていた時、平泳ぎで東北大会優勝の実力を見込まれ、神奈川県内の水泳協会から誘いがあった。

気仙沼を離れる日。母・智恵さん(51)が駅まで車で送ってくれた。最初は明るく話していた母が、次第に口数が減り、気づけばぼろぼろと涙を流していた。「あなたの頑張りが、私たちの勇気になるの」と送り出してくれた。

「横浜で自分にできる」とは何か」と考える中で、震災半年後、語り部活動を始めた。周りで被災地のことが話題になる機会が少なくなっただけに危機感があつた。「被災地とつながりたい」という思いもあつた。

「海が燃え、ホテルに閉じこめられた3日間、消火器を抱いて寝た」。同世代の友人らの前で話し、支援を受ける一般財団法人「教育支援グローバル基金・ピヨンドトゥモロー」(東京都)が主催する首都圏や米国での講演会でも語った。ある米国人は「あなたのように防災に貢献したい」と声をかけてくれた。

水泳では、2011年9月の国体・少年男子2000円平泳ぎで12位に入った。大学では水泳部主将を務めた。自分なりの「復興」を模索し続けた。

将来は気仙沼の同級生と、水産業の復興を後押し

する会社を起すのが夢だ。その第一歩として、春には三陸の魚介類を扱う飲食店を展開する都内の企業に就職する。

就職後も語り部を続けるという藤田さん。「3月11日、人生は変わった。5年前より僕は大きくなった。故郷に恩返しするのはこれから」と力強く語った。